

ガイド

土台支持柱の発見

昭和の大修理によって、土台支持柱が天守台内部に埋め込まれていたことが発見されたことは大きな成果であった。天守の重さを石垣へ掛けずに地面に均等に伝える築城技術の発見であった。その当時の事情を「国宝松本城 解体と復元 編集竹内 力」によって見てみたい。そして、現在の土台支持柱はどうなっているかを明らかにしたい。

○土台支持柱発見

月見櫓、辰巳附櫓、渡り櫓、乾小天守、天守の順に解体、各土台の実測をしたところ、天守と乾小天守の土台はいずれも菱形^{ひしがた}なので、なんでこのような変な建て方を行ったのか不思議でならない。話によれば比の形は昔の糸巻に似ているので、糸巻形という由、天守においては西南の隅に向って建物の勢いを付けるためだということだが、これでは復元に苦労すると話題となった。

さていよいよ天守の土台の寸法、材種の調査実測も全部完了し、解体材は格納倉庫に運び整理が終ったのでその旨事務所に報告された、丁度その折に当時博物館に嘱託で居られた。伊藤政一さんが来所しており築城当時の話をしていたが、伊藤さんの話題によれば、松本城築城の時は、杭を打込み、其の上に土台を置いたという一部の説があるので天守の土台の下端に土台を支えた杭か何かの穴があるのではないかと、又抜け穴、トンネル等とは思ってもよらない話となったので、さてその調査を改めて行うこととなった。

忘れもしない昭和二十七年三月三日再調査にかかったところ、はたして天守入側^{いりかわ}（中通り）土台の下端に五ヶ所にわたり、ほんの少しの穴らしき痕跡が発見された。これにより土台自体の痕跡を頼りに穴と思われる位置を見当に調査の結果天守全体の敷地に十六箇所の全く腐蝕してその姿をとどめぬ杭の跡が確認出来た。そのうち一本はどうか原形に近いものが掘出された。この穴を次第に除々に掘下げると約七尺ほどのところ、（土台下端よりは八尺五寸）に横穴も発見され次第に調査はすすんで、十六本の柱は一列に四本づつ四列になっており、この柱の長さは約十六尺三寸、径約一尺二寸内外で、横穴はこの柱に胴差で横に継がれており胴差しは、径一尺一寸内外であることが明らかになり木材質はいずれも^{つがさい}榿材であった。

これにより天守台は、土台支柱枠組を石垣の内側に組み上げ、後に石垣を積みながら内部の支柱を埋め立てたことが明らかになった。工事事務所より電燈線を仮設して十六本の穴の底を調査した結果いずれも支持柱受けの大石が据えられてあり基礎としての耐久力充分と考えられた。これにより天守の荷重を石垣



に多く伝えず、この柱によってまず支持せんとした考慮がうかがわれる。(以上引用)



土台支持柱鉄筋枠 ↑・→

○現在の土台支持柱

木造の支持柱では、再び腐朽するので、今回の修理では、鉄筋コンクリート造とした。柱の長さ4.85m、径36.3cmとし、主筋2.5cm、8本、フープは径9mmを螺旋状に主筋に緊結し旧梅支持柱跡を径45.5cmに穿孔して鉄筋を差し込み、コンクリートを打ち込んだ。支持柱頭部には、鉄製箱形のほぞを埋め込み、土台へのほぞとし、土台下端との接触部には絶縁用に銅板厚さ9mm、径36.5cmを敷き込んだ。

(「国宝松本城」松本市教育委員会より)



